

どしんと コミュニティセンター



「伊勢志摩サミットを振り返って」

Vol.123

去る5月26日・27日、無事伊勢志摩サミットが終わりました。テロも何もなくてよかったなあというのが関係者や市民の偽らざる気持ちでしょう。振り返ると、昨年の6月5日の夜、鈴木知事から「サミットが伊勢志摩に決まったよ」という電話が入りました。多くのライバルたちを抑えて決定したことに、嫁さんをもらった時ほどではありませんが、大変うれしかったことを覚えています。

ただ、サミットは政府と外国との関係の事案ですので、市の方にはなかなか情報が入ってこないというえ、こちらの思うようにはいかないことが多かったように感じました。ミキモト真珠島で行われた配偶者プログラムにしても、行われるということについてと

うとう最後まで明確な発表がなかったため、事前のPRもできませんでしたし、鳥羽でやるのにアトラクションのひとつに伊勢市の提案が採用されていたことを問う声も聞きました。市からは、何度も職員が提案を繰り返し、写真撮影の時なんとかTOBAの文字が世界に発信されるようになりました。実は私たちは配偶者プログラムが鳥羽でそしてミキモトで行われることを早くから予想していました。そこで鳥羽市とミキモト共同で、来ていただいた配偶者全てに真珠のネックレスをプレゼントしようと考えておりました。御木本幸吉翁が「世界中の女性の首をこの真珠で飾ってごらんにいれませ」と言った、いわば遺言を実行でき、鳥羽の真珠のPR

にもつながると思ったからです。ところが国から待ったがかかりました。国側が準備しているプレゼントと同種ものは罷りならんということでした。

サミット開催中、多くの警備関係者がこの地に来てくれました。若くて元気な警察官が市内あちらこちらでジョギングする姿が見受けられました。市民からは「若い人がいっぱいいてくれるのは良いものですね」という声がよく聞かれました。サミットが終わり警備の人たちが一斉に帰ってしまうと、何かさびしく感じます。後には整備された道路とガードレールが残ったようです。

サミットによって大きなメリットがあったところ、逆にデメリットがあったところもあつたでしょう。しかし私たちはG7サミットという歴史的大イベントが伊勢志摩へやってきたということに誇りを持ち、感謝し、このレガシーいわゆる遺産を大切に今後々まで語り継いでゆかなければなりません。最後にご協力いただきました市民の皆様、おもてなし会議のメンバーなどすべての方々にお礼を申し上げます。



Vol.150

虐待と躰

虐待に関する事件が依然、後を絶ちませんが、その際、「しつけのために」という言葉を見聞きします。

虐待と躰の境界線はどこにあるのでしょうか。

「虐」の字は虎が人を掴む様で「むごい」「しいたげ」といった言葉です。「虐待」を調べてみると「むごい扱いをすること」「習慣的な暴力行為」「冷酷・冷淡な接しかた」と書かれています。また、虐待は大きく2つに分類され「支配型虐待」と「放任型虐待」があります。「支配型虐待」とは、子ども

の意思ではなく、大人たちの思い通りに、行動させるため命令・強制により虐待を行うことです。

「放任型虐待」とは、大人の都合が優先され、子どもが放任(ネグレクト)されている状態をいいます。いずれも、大人の身勝手な思いや価値観であり、そこに子どもの人格は認められていません。

「躰」の字は分解してみると「身」「美」となり、身だしなみを美しくすることです。意味を調べてみると、「礼儀作法を教える身に着けさせること、また、その礼儀作法」「犬や猫などペットの教育」と書かれています。

子どもたちは、さまざまな個性を持った人格のあるひとりの人間です。暴力や暴言によって、精神的な苦痛を与え、体にあざや心を傷つける行為は「躰」ではなく「虐待」です。「しつけ」は1日や2日で、なし得るものではありません。長い時間をかけて子どもたちとじっくりと向き合い「人として」大切な事を共に学んでいくことではないでしょうか。

